広津和郎論

――「怒れるトルストイ」を中心に――

坂根俊英

平野謙は「点を辛くしていえば、広津和郎の作品で後世にのこるにたるものはやはり『作者の感想』一巻と『やもり』一作だけ、といってもそんなに誇張ではない」(「群像」昭27・1)と言っている。『作者の感想』には雑誌「トルストイ研究」に分載された評論「怒れるトルストイ」が収録されている。「怒れるトルストイ」は大正六年二月、三月に発表されているが、その執筆動機は広津和郎の小説「波の上」を参照することによって知ることができる。「波の上」の中で主人公「僕」は「君」から『クロイツェル・ソナタ』を借りて読み、その感想を述べている。

「君が是非読めと云って、僕に勧めたのだった。君は僕の生活を知ってゐて、あの恐ろしい作物を僕に読ませようとしたのでない事は、僕にもよく解ってゐる。トルストイの崇拝者である君は、あの作の価値と云ふ点から、一読する事を僕に勧めたのだと云ふ事がよく解ってゐる。けれども、その結果から云へば、実際僕には堪らなかった。恐らく、屹度、僕ぐらゐあの作によって、恐ろしい打撃を受けた人間はそんなに沢山はゐなからうと思ふ。」

この場合「君」というのは小説上の設定であって特定の人物をモデルとするものではないが、それが「トルストイの崇拝者」と規定されているのは大正時代、トルストイの人道主義が日本の思想界を風靡し、多くのトルストイアンを生み出したという風潮を背景としている。ここで「僕」の受けた「恐ろしい打撃」の背後に「僕の生活」があることは明らかである。「僕の生活」の悩みを語ることこそ「波の上」のテーマなのだが、その「生活」とは簡単に言えば「又、愛しもしない女との間に、子供がひとり此世に生れ出る」といった不幸な結婚生活にほかならない。それは当時の広津和郎自身の実生活にそのまま横たわっていた苦悩につながっている。すなわち「やもり」「師崎行」「静かな春」「水の上」等の私小説にくり返し描かれる苦悩である。

年譜を見るとこれらの小説の背景をなす「事件」は大正四年に始まっている。

「この年の初めから下宿の娘である二つ年上の女性との関係が始まる。十二月、長男賢樹が生まれた。大正七年五月末、鎌倉山の内に移転、家庭生活の再建を試みたが失敗。この年三月、長女桃子が生まれた。大正八年の暮、数年間悩んだ結婚生活を破壊した。」

この経験が広津和郎にとっていかに深刻なものであったかは、この経験を素材としてくり返し私小説を書きながらそれらがいずれも後の小説よりすぐれた小説的リアリティを獲得していることによってもわかる。その経験がいかに広津和郎の魂に深い刻印を残したも

のであったかは単にその経験が私小説に反映されたのみならず、その経験を悩み抜くことによって広津和郎のものの考え方、思想が鍛えあげられていったということによってもわかる。広津和郎は「愛してもいない」娘と過失をおかしてしまった自分がとるべき道をあれこれと模索し、その問題を真面目に悩んだのであった。あっさりとふり捨てることは彼の「責任」が許さなかった。さりとて全面的にひきうけて「結婚」することは自己の破滅に結びつくことであった。ずるずるとつい解決をのばすうち、子供が生まれ、ついに「愛そう」と意志的に努めるような無理な結婚生活に入っていったのであった。この経験から考え出された問題は一つには自己と他者の問題であったと思う。自己を生かすことが他者を傷つける形ではやりたくない、さりとて他者のために自己を滅ぼすことはなおさらごめんだというジレンマ、この白樺派にも共通する二律背反が広津和郎の初期作品にはしばしば出てくる。よく広津和郎の「ねばり強さ」ということがいわれる。それは特に後年になって発揮される資質であるが、この初期の経験に対する対処の仕方にもその独特な「ねばり」はやはり発揮されていると思われる。それは問題に対してやはり「みだりに悲観もせず楽観もせず」どこか解決点はないかと辛棒強くたちむかってゆく態度であった。

それはともかく、「怒れるトルストイ」の背後に広津和郎自身の不幸な結婚生活があったという事実はなにも評論を実生活の次元にひきおろして楽屋裏をのぞこうがために指摘するのではない。逆に、その実生活から広津和郎がいかに普遍的にくみとるべきものを評論の形にくみあげていったかをみるためである。そもそも広津和郎には具体的経験から出発しながら、その具体的価値を少しも損ずることなく普遍化して考えようとするような普遍化志向とでもいうべきものがある。それはしかし抽象的論議を好むというのとはまったく違う。それはあくまでも具体的問題を客観的に冷静によく見る手段であって、普遍化したまま満足するというのではない。普遍化して考えることによって具体的問題に対する解決の糸口をさがそうとする態度である。さて、「波の上」にかえってもう少し引用を続けよう。

「僕はあの作（クロイツェル・ソナタ）に厚意が少しも持てなかった。非常な反抗心が、むらむらと起って来た。あんな解釈の仕方はないと思った。——ああ云ふ渦巻の中に陥ってしまってゐる者に対しては、トルストイのあの作は何の解決の光も与へない。——唯傷に塩だ。メレジコウスキイの云ったやうに、傷に塩だ。——痛むばかりだ。しみるばかりだ。そしてそれっきりだ。」

ここで「僕」のものの考え方を点検しておきたい。「僕」にはトルストイの作品が「傷に塩だ」と受けとられているのであるが、それによって「恐ろしい打撃」を感じながら、うちのめされてばかりはいない。「僕」の求めるものはあくまでも「解決の光」であり、「解決の光」を与えてくれないトルストイに対しては「非常な反抗心が、むらむらと起」るばかりである。この「僕」の「反抗心」こそ「怒れるトルストイ」を書かしめた広津和郎のエネルギー源にほかならない。「傷に塩」という「打撃」をうけながら「反抗心」にかられて評論を書く広津和郎は、しかし単に批判のための批判をしたわけではあるまい。そこには今、「渦巻の中に陥ってしまってゐ

る」自分を救い出してくれる「解決の光」は見出されないものかと、そのせめてものよすが、糸口を見出そうとする姿勢もあったと思われる。

すなわちトルストイ式に問題を高所から残酷に否定し去る態度ではなく、問題の近くに降りたって「渦巻」の中からいかに生くべきかを模索する態度を提示する意味があったと思われる。続いて「波の上」の「僕」は言う。「そっちに行くと、溝に落ちるぞ、かう云って、此人生の危険区域の入口に立札をしてゐるのだと云ふ事だけはよく解る。併し危険区域に陥ってゐる者に対しては、救ひにも何にもならない。」

広津和郎は何を求めたかというと「危険区域に入り込んでしまったものに対して、どう云ふ処置を取り、どう云ふ同情を表し、どう云ふ愛を示さうと云ふやうな考」であった。

この意味で彼にとってはトルストイよりもチェーホフの方がずっと暖かみのある作家に思えたのである。まさに生活上の「危険区域」に陥っていた広津和郎にとってトルストイが「恐ろしく冷淡に見えた」のは当然である。

「怒れるトルストイ」において「波の上」の引用部分と照応するところはやはり「クロイツェル・ソナタ」について触れた部分である。その作品について広津は「みづからの焦燥を支配する事が出来ずに悩んで、バラバラになった統一のつかない良心を蟲歯の神経のやうに露出してゐる人間には、それは鎮痛剤にあらずして胡椒のやうな刺激物である」と述べている。ここで、「バラ〳〵になった統一のつかない良心を蟲歯の神経のやうに露出してゐる人間」とはあの「危険区域」に入り込んでいる筆者自身を指すとともにまた「性格破産者」という言葉をも思い出させる。「性格破産者」のタイプは「神経病時代」にみられるが、「神経病時代」の主人公は半ば作者自身を反映し、半ば作者によって批判的に造型されカリカチュアライズされている。同様に「性格破産者」は同時代の知識人一般の普遍的性格であると同時に、広津和郎自身の内部にも巣喰う性格でもあったのだ。「性格破産者」を扱ったもう一つの小説「二人の不幸者」の序文は広津特有の普遍化志向を示すものだが、そもそも「性格破産者」という規定の仕方そのものが、まったく自己を離れた発想から生まれたものではない。

さて、そろそろ「怒れるトルストイ」の内部に入ってみたい。「怒る勿れ」の章では「わが宗教」をとりあげて、「『わが宗教』には、トルストイの宗教に入った自覚の第一歩がよく語られてゐる。」と述べている。そして基督の五誡のうちトルストイは「悪に依って悪に抗する勿れ」を一番重大なものとしているけれども、最も重大視するべきは「怒る勿れ」であるというのである。「悪に依って悪に抗する勿れ」とは悪に対する無抵抗主義である。これをもとに「怒る勿れ」を解釈すれば、やはり「総ての人と平和を保つべし」という平和主義となる。しかし、広津は「怒る勿れ」とは個人と個人との間、人類間の平和を保つべき誡であると同時に、「個人と『神』との間の関係を述べたものである」と考える。「何故なら、『怒る』と云ふ事ほど我々の霊魂の成長力を害するものはないからである。」と述べている。ここで広津は「神が個人に与へた生命の力」ともいっている。宗教的自覚に入ったトルストイの方がむしろ人間間の怒

りを問題にし、広津の方が神と個人内部の問題に目を向けているというのは興味深い。

「怒る」とは広津の場合、何よりその結果「怒り」を発した自己自身にはね返ってくる損失であったらしいのだ。それはやはりたえまなく日常生活において「怒り」を経験し、その結果、自己の精神的成長力を損ねられてきた経験からくる考えに違いない。「神経病時代」には「妻のよし子」を撲る場面がでてくる。その直前、主人公の「彼の頭の中には憤りと憎悪と浅猿しさと自己哀憐とがごつちゃになって出来上った亜苦しい瓦斯のやうなものが、ふくふくと泡立ってゐた。」とある。そして「妻を撲る」という形で怒りを爆発させてしまった原因を分析して、「神経に与へられた波動」をあげ、それが「更に鋭く、更に感じ易く、まるで露出した鰌(どじょう)歯の神経のやうに敏感になってゐた」ことをあげている。そのようにして怒りを爆発させた後、主人公は「何とも云はれない淋しい頼りなさ」を覚えるのである。ここで作者は「怒り」そのものを人間の理性を超えた不合理な感情としてとらえ、そのような不合理あるいは不条理に支配される人間を不幸でみじめなものとして眺めている。主人公は自己の行為を反省し、「何のためにあゝ云ふ事をしたのだらう?」とか「馬鹿な事」とか述べているが、作者はそういう主人公を通じて「怒り」を克服し、調和に到る道はないかと願っているといってもいいだろう。ついでにここで広津和郎の「志賀直哉論」を思い出しておく。『「感情には予定がつけられない」と『和解』の中で氏(志賀)は云ってゐる。此事は氏が此爆発性をみづから意識して、それに対して如何に用意周到の警戒をしてゐるかを示してゐる。若し此世の醜悪、凡庸と妥協すまいとする氏の警戒性を、第一段の警戒性と名づけるならば、この自己の爆発性に対する氏の警戒性は、それよりももっと複雑な、第二段の警戒性と云ふべきである。」

爆発性はなぜ警戒しなければならないか。それは予定がつけられない、すなわち意思の力を超えて自動運動を起すからである。このことを広津和郎は志賀直哉以上に知っていたといえる。なぜなら広津は自己の中にこの「警戒性」が少なく、しばしば「爆発性」に身を任せることが多いのを身にしみて感じていたに違いないからである。すなわち広津は志賀の「警戒性」にある羨望を感じていたと思われる。しかし、「志賀直哉論」を広津は最後に結ぶにあたって「調和の世界」に自足してゆきそうな志賀文学に「再び外に向ってその眼を見開く」ように要請している。そういう「調和」の方向は「警戒性のはりつめられてゐる結果」からくる「引込み思案」がもたらしたものであると指摘し、「用意周到の警戒性」は「のびのびとした感情の成長を、多少阻害するうらみがないでもない」と述べている。このことは前の「怒り」が「我々の霊魂の成長力を害する」ということと矛盾するように見える。しかし、「成長」ということの真の意味を考えるなら、無用な感情の爆発がそれを損なうことも当然なら、まったくの「調和」が「成長」をもたらさないことも当然だろう。広津としては志賀のように「調和」もせず、さりとて「怒り」に身をゆだねて日常生活の愚劣に足をとられることもない「成長」こそ頗わしい道だったと思われる。その「怒り」がしばしば「神経病時代」その他に見られるように妻に対する爆発の形をとったとすれば、それは今、「危険区域」におちこんでいる生活全体を立て

なおさなければとうてい解決できない問題でもあったのである。

広津は言う。「怒ると云ふ事は、自分の生活力を消耗させるばかりではなく、『神』に対する、『無限』に対する冒瀆なのである。」広津に神に対する信仰があったかどうかは知らない。しかし、少なくとも「無限」ということ、個人が無限に達して行くところの素質に対する信仰は、自己を生かしたいという願望となって彼にあったと思われる。その意味ではトルストイを批判する広津も大正期の白樺派的自我信仰と無縁ではない。

「怒れるトルストイ」の第二章「ナポレオンとクツウゾフ」ではまず、ゾラ及びヂュウマに対するトルストイの批評を紹介している。

ゾラが科学に対する信頼に立って宗教を否定し、「全力を尽して働く」ことを提唱したのに対し、トルストイは働く事は現代のようにすべての制度が間違っている場合には「悪の助勢」になるのだといって「無為」を主張する。一方ヂュウマが「いつかは同胞的愛の国が此地上に実現されるだろう」と予言した点はトルストイの共感を得たが、ヂュウマが「決して或改革を強ひてはいけない」と言ったのをトルストイは見落して「無為」を選ぶことを強制していると広津は批判している。

この点を論理的に考えるとどうも広津はあげ足とりに類することをやっているようにみえる。なぜなら、ヂュウマは「改革」の強制を問題にしているのに対し、広津は「無為」の強制に問題を転化しているからである。トルストイの言説主張を「強制」ととるなら、あらゆる思想言説を「強制」ととることも許されるだろう。広津は「叫喚」の代わりに「沈黙」が必要であるというが、「沈黙」すれば「思想」の意味はない。しかし、ここで私は広津のあげ足とりをするつもりはない。要するに広津にとってはトルストイの主張が「命令に近い強制」に聞え、その「叫び」には「彼の性急が、現代文明の恐ろしい呪咀から来る性急が漲ってゐる」と思われたという方が重要であろう。とにかく広津のような現実主義者にとって「無為」というような極端な方法は決して受け入れることのできない主張だったのである。トルストイと同じように現代社会の「悪しき制度」に対する批判の目は広津も十分持っていた。そのことはやはり「神経病時代」における新聞社の悪を政治悪、社会悪につながるものとして、鋭く剔抉しょうとする姿勢に発揮されている。しかし、「二人の不幸者」の主人公にしてもそうだが、彼らは社内の不正に憂鬱な毎日を送りながらも、「無為」をよしとして辞めるわけにはいかないのである。それによって悪がなくなるわけでもないし、何より彼ら自身が食べること生活することが出来なくなるからである。この新聞社の出来事は広津の勤めた毎夕新聞社時代の体験がもとになっているといわれている。とするなら、「トルストイの憤は非常な同感を以て我等の心に響く。」という言葉は社会悪に関する限り、実感的にそのとおりだったのである。

しかし、広津は「一寸の間でも仕事の手を休めたならば、此恐るべき時代は、多くの個人を瞬く間に餓死せしめてしまふであらう。」という現実的具体的不安から、とうてい「無為」に賛成することはできなかったのである。さりとて当時の広津が社会改革を念頭においていたとも思えない。ただ「憐憫」とか「忍耐」という言葉があるだけである。

第三章「生は死の準備か」においてはトルストイが「死」を「救ひ」とみるのに対し、広津は「死人に口なし」という現実的発想法で死後の問題に立ち入ることを避け、「生」の側から「死」をみようとしている。そして、次のように述べる。

「トルストイは此貴重な生を、此貴重な生の全部を『死の準備』たらしめんとする。私は『死』は見たくない。見るを欲しない。併し見なければならぬ事実ではある。だが、此事実を泰然として認識し得る強い精神力を持ちたい。その精神力は死の準備をする事によって得られるものではない。生きる事によって得られるのである。」

ここに両者の差は明瞭である。しかし、トルストイの悲劇は「死」を「救ひ」とみるような消極的思想が現代文明に対する激しい呪詛にみられる意志の力と生活力と同時に混在していたという矛盾である。広津はトルストイの最後の言葉「否、もう終りだ」をとりあげて、トルストイの生に対する執着をみようとする。すなわち、肉体が観念を裏切ったとみるのである。

また広津は肉体を離れた霊魂の存在を信じない。それは「死んで見なければ解らない」からである。それは観念的宗教的発想に対する極めて素朴な現実的発想の対置である。

広津和郎の思考方法は現実の側から観念の欺瞞を照射し暴き出すのだが、その際、現実の地平にのみ留まっているのではない。それは必ずもう一つの観念志向、普遍化の情熱に支えられているのだ。第四章の「自己完成と discord」についてもそれはいえる。ここで「discord」はちょうど「怒り」に対する批判と同じ意味で批判の対象となっている。それがロマン・ロオランの言うごとく「自己満足に溺れてゐないトルストイの『完成にまでの道に在る動きの標(しるし)』」であればよいのだが、広津はそれを「寧ろその進み行く運動が障碍にぶつかってゐる標」とみるのである。その証拠として広津は「法悦の欠如」をあげている。ここで再び広津がトルストイの「discord」に注目し、「法悦の欠如」をあげた意味について考えてみたい。すなわち「怒れるトイストイ」を書いた広津自身「自己完成」をともなわない「discord」に支配されていたのではなかったか。そして自己の「苦痛には、法悦がない」ことを身にしみて感じていたからこそ、トルストイの「discord」の実体を正しく見抜くことができたのだと思われる。高見順との対談によれば広津自身執筆動機について次のように告白している。

「あの discord というのは…。

広津「まあ、不調和とか不協和ですね。一つはその頃のぼくの苦しんでいたことと関係があったから。」(「対談現代文壇史」)

この「苦しんでいたこと」が広津の一連の私小説で扱われる女性問題を指すことはほぼ明らかであろう。とすればそれがまったくの「泥沼」であり「法悦なき苦痛」であったことも首肯される。「discord」とは橋本迪夫によれば「晩年の『転機』以後のトルストイが理想の追求に急なあまり焦燥にかられ、心の調和を失っていたと見る立場から生まれたことば。」(「日本近代文学大系40」)ということだが、広津和郎の初期の人生態度はニヒリズムを基調としながらそこからの脱出を模索しているという意味ではやはり一種の理想主義者であったといい得る。しかし、理想主義者の面はまだ色濃くは作品そのものに反映せず、むしろ暗い「憂鬱」にぬりこめられているという

ても過言ではない。その「憂鬱」の原因は種々考えられるが、第一に父広津柳浪の病気、第二に兄俊夫の乱脈な生活、第三に彼自身の結婚問題等が彼の私生活を悩ましていた。父柳浪は硯友社出身の作家であったが自然主義が文壇を支配して以後はほとんど沈黙を余儀なくされ、大正三年病気となり、翌年知多半島師崎の海浜院に転地療養した。広津和郎は父を終始敬愛し、大正五年には両親を片瀬の家に迎え、生活の面倒をみている。一方、兄俊夫はしばしば家のものや知人友人のものを持ち出して売ったり、会社で不始末をおかしたり、そのたびに弟和郎に迷惑をかけるという厄介者であり、一種の性格破産者であった。広津和郎自身の女性問題をいよいよ抜差しならぬところにまで追いこんだのもこの兄であったとさえいえる。というのは大正五年四月、広津和郎が予備召集で三週間、世田谷の野砲兵第一連隊に入っていた間に、兄は弟和郎との約束を破って永田町の下宿に近づき娘の母親から借金をしたり、弟の家財道具を無断で持ち逃げしてしまっていたのである。それによって和郎はいよいよ下宿の娘との関係を負目と感じ結婚へと決意させられてしまうことになるのである。まったくこの頃の広津和郎はどこに光明を見出そうとしても見出しようのないほど四方八方から追いつめられていた。しかし、彼はそんな暗い絶望的な現実をたえず何とか脱却したいと願い、そのために悪戦苦闘していたといってもよかった。おそらく精神的には「憂鬱」に心を閉ざされながら、これではいけない何とかしなければと「焦燥にかられ」ていたに違いない。広津こそまさに「心の調和を失っていた」人間にほかならないのである。広津は「如何なる点から杜翁を見るか」(「トルストイ研究」大6・7)の中で「焦燥」について次のように述べている。

「私が焦燥が如何に人生に害があるかを説かうとするのは、私自身が始終此焦燥に苦しめられてゐるからである。此焦燥が私の生命を害して行く事を、私は始終経験してゐる。私はこの経験を説かうとするのである。」

ここに「怒れるトルストイ」のモチーフは簡明に明かされている。それはまさに広津自身の「経験」という極めて具体的なものから出発していたのである。ここに観念的トルストイ受容とはまったく対極的な対し方があることはいうまでもない。

「トルストイ研究」の初出文では、第三章の前半にトルストイの思想の性急さを表わす例として、肉食の罪悪を説いた菜食論と、『クロイツェル・ソナタ』の性欲論があげられていたが、『作者の感想』収録の際にいずれも省略されている。これは何故か。『作者の感想』は大正九年三月に出ている。この前年の暮、広津は数年間悩んだ結婚生活を破壊している。すなわち「怒れるトルストイ」のモチーフにあった広津自身の私生活の問題は一応決着がついたわけである。とすれば、あまりにも自己の現実的問題と密着しすぎた部分は削除してもっと客観的なトルストイ批判として公刊しようとしたと考えてもあながち間違いとはいえないだろう。しかし、文学の不思議は、実生活において厄介で憂鬱な問題の山積していた大正六年から大正八年にかけてが最も実りある作品を残し、一応の安定を得た大正九、十年頃からはむしろ創作意欲を失い、間に合わせの作が多くなったという事実である。それはともかくとして、トルストイの菜食論に対する広津の批判は次のような論点を含んでいる。す

なわち肉食を罪悪とするなら菜食すら罪悪ではないかと言い、罪悪に対して過剰に鋭敏になることをいましめている。いわばトルストイの道徳的リゴリズムを批判しているわけであるが、この点を考える際、広津の念頭に自己の犯した「罪悪」が意識をかすめなかったとは限るまい。すなわち「愛」なき肉体的過失は確かに「罪悪」には違いなかろうが、さりとてその「罪悪」を全面的にひきうけてしまうことは自滅につながると彼は思ったのに違いない。しかし、「罪悪」に対する鋭敏な感受性も人一倍強い彼は何とかそのような「罪悪」をものとも感じないほどの「強い性格」を持ちたいと願っていた。そのような彼の「弱い性格」になお鞭をうつような、傷に塩をなすりつけるようなトルストイの道徳的リゴリズムには当然強く反発する必要があったのである。しかし、だからといって広津は「罪悪」に目をつぶってすますことが正しいことだと思っているわけではない。その間の彼の考えは「自由と責任とについての考察」で普遍化されて展開されている。そこで広津は、「絶対自由を与へられてゐるからこそ、人間は責任を感じなければならないのである」といい、「真の個人主義者は最も責任感の強い人間でなければならない」と言って「責任」の重要性を強調している。しかし、注目すべきはそうした公式論よりもその評論の終りの部分に述べられた釣針に引っかけられた猫の事件から彼のうけた心臓の圧迫である。その結果「虫一匹殺す事が出来なくなった」という広津和郎の姿はまさに菜食論者トルストイの姿である。しかし、広津は「虫一匹殺せない」感情を正当なものと是認したなら、「焦燥の気持ちに駆り立てられて、無数の猫の口から釣針を引き抜かうと駆廻ったって、決してキリがない」ことをよく自覚していた。彼は、「この感情を圧伏する事に修養しなければならない」と考える。そして言う。

「人は各々その性格の中に、うつかりするとその性格を喰ひ尽してしまふところの毒素を持ってゐる。私が若しこの感情をあふり立てたならば、それは私の個性の完成を乱す最大の毒素となるに違ひない。」

「怒れるトルストイ」において広津はトルストイの「怒り」を「毒素」の発現としてみている。この「毒素」に対する警戒が人ごとならず広津自身の性格を喰い破りかねない危険性にもとづいてあったのである。

トルストイの「性欲論」についても広津にとって自己の盲目的な「性」の力の発動がもたらしたものを省みてもそれが非現実的な「独断と性急」の表われとみえたことは当然である。とにかく広津は極端ということを嫌う思想家である。広津は「'all or nothing'の思想は人生全体を焦躁にする」といい、トルストイの思想は「此の "all or nothing" の思想に特有な焦燥を帯びていた」と述べている。

この「怒れるトルストイ」を書いた時期における広津和郎の関心事がかなり自己自身の心の姿に照らし合わせて考えられた個人的な要素を強くもっていたことは注目される。「無為」に対する批判には多少の社会的な目くばりがなされているにせよ、まだそれは社会批判の域までにはいたらず、やはり自己自身の「生活」感の反映でもあった。その意味でトルストイの「現代文明に対する呪咀」という社会的な観点は広津の中に入ってきようはなかったのである。広

津は「トルストイは個人の解脱をゆるさなかった」といい、「強い精神力を持った者は、此の世の真実――悪さへも正視しつつ静かに一歩一歩と、あせらずに撓まずに自分の道を進んで行くであらう。」と述べている。広津にとっては「我々人間が到達出来るのは」「個人の解脱」迄であって、「それ以上は神の統一にまかせなければならない」という考えがあった。「霊魂の成長力」にしろ「自己完成」にしろ「個人の解脱」にしろ、そこには「自己を生かす」という形での大正期的な自我のとらえ方が強くうかがえる。後に広津は「わが心を語る」の中で「自己の皮をひん剝き、ひん剝きして行って、終に『無』に達したラッキャウの『虚無感』」を自覚するに到ってはじめてこの自我主義は超克されてゆくのである。それは「個性の独自性」や「自己の探求」ということが「自己を堀り下げる」とか「己れ自身を知る」といった個人的な精神内部で推進できると考えていた大正期的自我観への反省であった。それは昭和四年のことであり、この頃から広津の視野は個人的な領域を超えて広がりをみせ、ジャーナリズムに引き回される文壇の危機を説き、出版ジャーナリズムの拡大に対して文壇が結束して生活権擁護のために団結する必要を説き始めるのである。しかし、そういう広い視野は個人生活の圧迫に悩んでいた広津にとって持ちようがなかったというのが「怒れるトルストイ」執筆の頃の実相であった。まず、おのれの「個」そのものを「生活」から救出すること、それが当時の彼の悲願であった。両親の生活の面倒を始めとして、妻子の生活の面倒、さらには兄の面倒までその双肩に担わなければならなかった彼にとって、「物質的自我」を否定するトルストイ思想がまったくの空理空論にみえたとしても不思議ではない。当時の彼はわずかの不定期な翻訳料を生活の支えとし、だんだん評論も書きはしたが、まだ作家ではなかった。生活は逼迫していた。広津は次のように言う。

「物質的な自我の幸福は、精神的な自我の幸福を打破する程度まで達すれば悪いものであるには違いない。併しトルストイは物質的自我を否定すると共に、精神的自我までも否定してしまふ。」

広津にとって「物質的自我」の欠乏がおのれの「精神的自我」さえ滅ぼしかねない時期に、「物質的自我」の否定がとほうもない妄想と映ったのも当然である。（了）

（尼道短期大学助教授）